

母となり五十九回正月し飽きずに結ぶお年玉袋

西川和榮

数え年六十歳になつた吾が子にお年玉を渡す、そういう意味の歌らしい。自身の行為を批判するような言い方で、照れながら表現しているところがみどころ。

幾許か由緒ありげな猫である暮れやすき日の夏目坂
下 峰尾碧

早稲田大学に近い新宿区の夏目坂は、夏目漱石の生家がこの坂の途上にあつたことからの命名とされる。今月の一連は漱石にかかわるもので、ここはもちろん『我輩は猫である』を踏まえる。偶然見かけた猫にさり気なく主役を振り当てたあたりは、さすがこの作者という気がする。

四歳の泥棒役が四人いてワハハワハハと酒盛りをする
る 高橋よしえ

幼稚園の学芸会に取材した作。泥棒役が舞台にいる場面をそのまま描写したかたちだが、「四歳」と「四人」、下句「ワハハワハハと酒盛りをする」が、その場のユーモラスな空気を的確に伝えている。

ひと言が歯車狂はせ沈黙がぐーんと長びく秋の夜な
り 新井勝

何人かがいるのではなく、登場人物は二人だろう。ふとタイミングが合わなくなつて、会話がぐーんとはぐになつた場面。食事中だろうか。「沈黙がぐーんと長びく」が、ふだんはそんなことのない、夫婦間の空気のようなものを感じさせる。

灯ともせば家となりたり暗黒の世をそれぞれに小さく区切る
渡辺はるか

「灯ともせば家となりたり」が、うまい。東京や大阪などでは体験できないまったくの暗闇。本当の暗闇のなかでは、灯りをともしなければ家は見えない。つまり存在しないのだ。灯がともつて、突如、出現した家。人間の「家」が出現した太古のことと言っても通用するような、不思議な根源性。

わが老いの明日を見るべし介護なる奉仕体験にけふ
申し込む 間宮清夫

奉仕体験で、じつさいの介護に取材した作。監視の姿勢に見えるから手を後ろで組んではいけないとか、誤飲防止のため連続して「あ音」を発声する練習をしたとか、介護の現場ではじめて知つたあれこれを、具体的に表現した具体性がポイント。ていねいな描写の手柄。

無言にてカレー食べ終え猫にのみ何か囁き娘は出掛
けたり 堀亜紀

いわゆる親離れをしつつある娘さんである。親の側からのとまどいをうたいつつ、これも具体的描写に徹して成功している。「猫にのみ」が、うまい。

火の灯る蝋燭一本いただきぬ今日おごそかにガン告
知受く 津幡昭康

蝋燭が燃え尽きるまでが寿命、という初代三遊亭円朝作の古典落語「死神」を踏まえているのだろう。「ガン告知」という深刻な事態を、引用でさらりと言葉化したアイデアに感動した。